は都市近郊林の保全，整備のためには不備な点が多い。[5)]

ただ個別的ではあるが，都市近郊林の保全，整備を一元的な目的として，具体的に方向づけを行なっているものとして首都圏近郊緑地保全法がある。これには第12条で買入れの可能性を規定し，目的達成へのかなりな有効性が感じられる。しかしわが国における土地利用計画には，その多元性，総合性，立体性，実効性の欠如が指摘され，制度的にみて各個別的土地利用計画は相互に有機的なつながりは見いだされない。そこで今後益々増大するであろう生活環境保全とレクリェーション需要のため，体系的な土地利用計画が切望される。その時忘れてならないことは実効性をもつことである。特に実効性の欠如は土地所有権を絶対不可侵の私権とする土地所有者の激しい抵抗に会うからであるが，しかし行政権力としての土地収用法にも多くの問題が含まれていることは，熊本県下筌ダム建設に際して，長期にわたった紛争からもうかがわれる。最後に，土地利用価値評価と地価形成の体系において，生活環境保全，文化の維持・発展といった立場にたつ要素は無視され，地代形成の要因とならないことは，[6)]都市近郊林を考察する場合でも最大の問題点と思われる。

参考文献

1)～2)・経済審議会土地政策研究委員会編：日本の土地問題第1部，昭和45年，経済企画協会

3)～4)・経済審議会土地政策研究委員会編：日本の土地問題第2部，昭和45年，経済企画協会

5)　・村瀬房之助：都市近郊林業に関する研究1，第81回日本林学会大会講演集，1970. 8（印刷中）

6)　・金沢良雄他：住宅問題講座8土地問題，昭和43年，有斐閣

愛　竹　の　人　々

宮崎大学　重　松　義　則

竹は姿の観賞面と材の実用面とからみて禾木科の王者である。この故に竹について詩歌に詠み画を描き修養の糧となし或いは実用性を事業化した世のいわゆる愛竹家は多いが，この人々を文献から拾集したのが別表である。（人名は概ね故人である。）

欧米人		
17世紀	アルヌルス・モンタヌス（蘭）	日本誌（自著）
1866	シーボルト（独）	日本植物誌　〃
1878	アウグスト・リビール（仏）	日本竹生長　〃
1896	フリーマン・ミトフオード（英）	竹植物園　〃
1903	ハンス・スペリー（瑞）	日本竹利用　〃
1902	ダビット・チャイルド（米）	フロリダに植竹
1907	ドクトル・ヘーフェル（独）	クマザサ駆除研究
1911	ヘンリー・サトウ（英）	駐日大使愛竹家
1911	ドクトル・ケルン（独）	ボン大学・ヤパン（自著）
1930	チャーレス・ホーム（英）	国会議員日本竹産業研究
1932	ドクター・テーラ（米）	農務局長・京都竹林　〃

中国人		
古代	神農氏	農，医創始の神
〃	竹仙	竹務の功・江南の守
周（BC.800）	太公望	渭川釣魚
BC.296	屈原	楚の憂国詩人
225	孟宗	二十四孝の一人

260	竹林七賢	竹林清談（山西の山陽県）
388	王徽之	此君詩
759	王維	竹里館（詩）
762	李白	竹渓六逸の一人
770	杜甫	柴門月色（詩）
846	白居易	養竹記　（〃）
1084	蘇東坡	緑筠詩・朱竹画
1939	呉佩孚	将軍・竹画
	為　政　者	
130？	景行天皇	大和坂手池堤植竹
1194	源頼朝	鎌倉植竹
1239	星野種実	筑後星野地方カシロダケ増殖
1525	今川義元	吐月峰植竹
1598	豊臣秀吉	京都々城，河川の堤上植竹
1600	加藤清正	熊本城雲紋竹植
1615	伊井直勝	彦根城植竹
1615～1800	金沢・白河・対馬藩	男山八幡のマダケ分植
1620	徳川秀忠	桂宮竹林亭植竹
1670	松平頼重	栗林庄植竹（高松）
1690	池田綱政	後楽園植竹（岡山）
1694	徳川光圀	西山荘植竹（水戸）
1707	徳川綱吉	江戸城内植竹
1717	徳川吉宗	江戸城内植竹
1736	島津吉貴	磯邸モウソウ導入
1816	内藤政順	五条目・延岡植竹
1841	徳川斉昭	偕楽園植竹・好文亭竹の間
1863	伊達春山	天赦園植竹（宇和島）
	文　士・学　識　者	
1553	山崎宗鑑	連歌師宗鑑やぶ
1694	松尾芭蕉	三冊子，奥の細道
1687	向井去来	落柿舎（京都）
1730	服部土芳	蓑虫庵（伊賀上野）
1754	横井也有	無待庵（名古屋）
1832	頼山陽	山紫水明の所，竹酒筒
1867	小林虎太	福岡宇美町の竹亭に三条實美ら五郷遊ぶ
1902	正岡子規	竹の里歌
1915	長塚節	坪井翁に植竹を学ぶ
1927	徳富芦花	恒春園竹庭
1928	若山牧水	植竹の歌
1959	浪花千栄子	女優・嵐山に竹生亭
1679	宮崎安定	農業全書（竹栽培に詳し）
1838	安井息軒	班竹山房（江戸漢学塾）
1925	坪井伊助	竹栽培研究
1930	神田菊之助	〃
1943	安藤時雄	〃
1944	竹内叔雄	竹の研究
1944	大国三郎	竹栽培研究

1969	大島甚三郎	竹栽培研究
	僧	**侶**
801	道雄	海印寺開山，唐よりモウソウ移入
860？	香厳	撃竹悟道（香厳省悟）唐の禅僧
1191	栄西	茶，寒竹移入（背振山）
1326	寂室	近江永源寺開山
1340	夢窓	クロチク移入（伝説）
1481	一休	筍談義
1591	千利休	茶・花の道具
1654	隠元	黄蘗山開祖明よりモウソウ移入
1667	元政	深草瑞光寺，三竿の墓
1672	石川丈山	詩仙堂
1719	道本	長崎崇福寺竹林庵　泰山竹移入
1762	日辰	身延山久遠寺植竹
1831	良寛	自然を愛す，竹の生長
1837	仙厓	博多聖福寺植竹
1904	天田愚庵	伏見桃山自庵ダイメウダケ枯竹
1961	山本玄峰	伊豆三島滝沢寺住職
	水	**防　林**
BC141	漢武帝	黄河決水修築
875	笹畑・山田氏	江川（島根）
1520	武田信玄	甲斐釜無川信玄土手
1580	豊臣秀吉	桂川，木津川，宇治川
1592	立花宗茂	柳川藩田尻相馬・矢部川孤林
1615	藤堂高虎	木津川お立薮
1600	？	滋賀安曇川植竹
〃	毛利藩	佐波川植竹
〃	？	久慈川（福島）
1624	鍋島藩	成富兵庫・筑後川
1619	京都代官	角倉与一，諸川
1663	土佐藩	野中兼山・仁淀川・松岡川
1670	岡山藩	熊沢蕃山・郊外諸川
1689	徳島藩	吉野川
1700	岡田将監	揖斐川（岐阜）
1716	児玉休右ェ門	米良川井関工事
1749	加茂領主	矢作川（愛知）
1826	熊本藩	河川土砂留め竹木植令
1931	岡田長兵衛	朝鮮慶南大和江水防植竹

欧米人：我国の書誌にのっている人名を拾録すれば上表の通り11名ほどある。彼らの日本竹を礼讃した観察記事は概ね自国の出版著書となり，我国の輸出竹加工品と共に欧米ににおける竹愛好ムードを大いに発揚した。しかしながら欧米における日本竹の育林は遺憾ながら成功しなかったようである。

為政者：中国古代には有名な愛竹家が史実にかなり多くのっている。日本でも中世の戦国時代に入って，諸将が競つて竹の増殖に努めた。殊に豊臣秀吉は本能寺の変における無防備にこりて，京の周囲に28キロに及ぶ大規模な堡塁の土手を築いて，その堤上に植竹した。また京の諸河川にも竹の水防林を設置した。なお秀吉が死期迫るとき盛夏というに，筍食を所望したことも語り草に残つている。次に愛竹記念面影が今日立派に残っているものに，水戸の西山荘（徳川光圀），偕楽園（同斉昭）や宇和島の天赦園（伊達春

山）などがある。

文士・詩（俳）人：中国には愛竹の詩歌を詠んだ著名人が極めて多い。特に王徽之・白居易・蘇東坡の詩には竹になぞらえて君子の道を後世の輩に指し示している日本には俳聖芭蕉の深い感化によるのか，その弟子共に秀れた竹の句が多いばかりでなく，彼らの居宅の建築にも竹を豊富に使っている。

小説・劇・随筆にも竹を題材にとりいれた文士の作品は多い。長塚節の如きは大の愛竹家で，青年時代遙々茨城から岐阜の坪井竹林翁の許に竹栽培の研究に行ったりなどして熱心な自営竹林家であった。

芦花恒春園（世田谷区 粕屋村の 徳富芦花遺宅）には，モウソウなど数種の竹が植えられ，雑木林の下には葉摺れ，さわやかなクマザサが一面に生えて，如何に往年の芦花が愛竹家であつたかが偲ばれる。

日向耳川のほとりの寒村に育つた詩人若山牧水も数々の竹の詩歌をよんだが，なかでも「窓辺竹影」の詩はよく知られている。

画家：竹の墨画は彩色画に比して遙に清楚で気品がある。中国では唐代に墨竹画が創まり，宋代になって盛んとなって元・明の時代には一層発展した。中国の有名な竹画家としては古来14氏を選んでいるが，芥子園画伝には26氏を挙げている。蘇東坡は詩人であるとともに朱竹画の達人である。また程堂は紫竹，解処中は雪竹，完顔亮は方竹を描いた。斯様に中国には愛竹画家といわれる人が数多く輩出した。日本では徳川時代の狩野一派や俵屋宗達らの端麗な竹画が社寺宮殿などの襖画として残されている。現代には横山大観・福田平八郎・川合玉堂らの作品が著名である。韓国ソールの守巌（妓生学校教師）も知られ，安田酔竹（岐阜）は朱竹画を 専門にし，木村平右衛門（元九電社長）が余技として竹画をよくした。

僧侶：竹はその自然の姿が素直高潔でしかも平和を表徴する植物であるためであろうか，僧侶には愛竹家が 非常に多い。 特に禅僧にその 傾向が濃厚なようで，それは中国の禅宗の発祥地が概ね竹の豊富な地区であったせいであろう。中国からの帰化僧や，また修業のため彼地へ渡航した日本僧侶らの手によって，しばしば中国の有用竹が日本へ導入された。禅の教えに「擊竹悟道」（香厳省悟）などの竹に因んだ標語がある。元政上人の如きは生竹を墓標にせよと遺言した程の徹底した愛竹家であった。

水防林：賢明な国主は庶民の安泰を願って河川の水防備林として植竹したが，九州では柳川・福岡・佐賀・小倉・臼杵・対馬の各藩がその例である。この植竹は本来の水防のほかに，非常の場合の代用兵器資材の備えとしてのねらいがあったことも容易に想像されることである。

林業における職場集団の生産行動に関する研究（XV）

——ある職場集団の崩壊過程に関する事例研究的考察 (8)——

宮崎大学農学部　中　島　能　道
九州大学農学部　塩　谷　　勉

ま え が き

Z営林署K事業所では，昭和39年から約3年8カ月の間に17人もの作業員が離脱していった。しかもそれが出勤率の低下と労務災害の多発という，はなはだ望ましくない現象をともなっていただけに，この限定された経営組織内で起きた，社会的な悪と見なされ得る。いったい，このような社会的な悪を結果させた行動の発現は，何に起因しているのであろうか，ということを明らかにするために，筆者らは，人事に関する資料，行動観察の結果，質問紙・面接調査などの結果をいくつかの仮説にもとづいて分析してきた。

本報では，過去7回にわたって発表してきた資料，ならびに若干の補足的資料にもとづいて，総括的な考察を試みるものである。

(1) 職場集団から成員を離脱させた要因

われわれは，成員をして，彼の職場集団から離脱させるにいたった要因群を，(i) モラール，(ii) 権威主義的態度，(iii) 集団規範（とくに一日の公正な仕事量